

■ 論 文

LD・PDD傾向のある中学生の心身の健康状態と親の 子育て困難感及び支援ニーズ

——「第7回愛知の子ども縦断調査」結果第2報——

山本 理絵^{*1}
神田 直子^{*2}

Health-Related Quality of Life of Junior High School Students with LD and/or PDD Tendency, Their Mother's Difficulties of Parenting and Needs for Support

Rie YAMAMOTO
Naoko KANDA

キーワード：学習障害、広汎性発達障害、育児困難感、育児不安、心身の健康状態、教師の障害理解
Learning Disability, Pervasive Developmental Disorder, Developmental Disabilities,
Difficulties of Parenting, Child-rearing Anxiety, Health-Related Quality of Life,
Special Needs Understanding

I. 本研究の目的

これまでの育児不安研究では、主に乳幼児期が対象となっており、小学生時期・思春期に渡るものはあまりみられない¹⁾。しかし、子育てとは、「子どもを守り・育み・自立へと向かわせる、胎児期から青年期まで」続く営みである²⁾。子どもが大きくなってくると、乳幼児期とはまた異なる子育て不安の様相や影響因が生じてくるであろう。とりわけ我々が対象としている、学習障害傾向の子ども（学習障害児および学習障害につらなる特徴をもつ子ども。「LD傾向」と略す）や広汎性発達障害傾向の子ども（広汎性発達障害および広汎性発達障害につらなる特徴をもつ子ども。「PDD傾向」と略す）たちには乗り越えていく課題が大きく、その保護者の労苦や不安も大きい時期であろう。我々は縦断研究という手法

を使い、1歳半（3歳）から10年間にわたり、同一対象者を追って親の育児不安、困難感や支援ニーズについて検討してきた。学年進行とともに、子育て困難感の内容も変化し、学校に関連する不安、学校の友人関係に関連する不安が高まることが示されてきた。また、2009年の第5回調査から、子ども（小学校3年生以上）自身にも心身の健康度・生活の満足度、精神的安定に関する状態、不登校意識等について調査し、親の回答と子の回答との関連を集計・分析してきた。

今回の第7回調査では、調査協力者の子どもたちは中学校1年生（以下「中1」とする）から中学校3年生（以下「中3」とする）となった。学校での学習もより難しくなり、学力差もはっきりしてくる中で、進学という課題が迫ってくる時期である。中学生の親が子どもに気がかりなこととしては、学習面・学業成績が大きなウエイトを占めてくるとともに、子どもを育てにくいと感

*1 愛知県立大学教育福祉学部

*2 元愛知県立大学教育福祉学部

じる人も多くなっている⁴⁾⁵⁾。

本研究では、このような中学生の時期のLD傾向やPDD傾向の子どもとそれ以外の子どもの親の子育て不安、学校関連不安、親子関係、親への支援ネットワークの状況、支援要求、また子ども自身の心身の健康状態や生活の満足感について比較検討することを目的とする。そのことにより、これらの子どもと親の状況を把握し支援を考える手掛かりをつかみたい。

II. 分析対象, 集計・分析方法

1. 調査対象と調査時期

第7回愛知の子ども縦断調査の分析対象者となったのは、前回調査で「次回調査にも協力する」と答え、調査用紙の送付可能で、返送・分析ができた母親426人（前回回答者の86.9%にあたる）と、その子ども406人である。母親対象の質問紙とともに子どもが回答する「子ども調査」の質問紙を同封し、親の了承と子ども本人の同意により調査用紙に記入してもらい、母親調査用紙と一緒に返送してもらった。調査時期は2013年3月である。

これまで6回にわたって行われてきた調査については、詳しくはそれぞれの調査をもとに分析した論文を参照されたい^{6)~19)}。

第7回調査への回答者の属性は、調査の性質上、第6回とほとんど変わらない。このうち、LDに関する質問項目に回答し分析可能であったのは409人、PDDに関しては422人であった。子ども調査の回答者数は表1のとおりである。性別に対する無回答がいくつかあったが、回答したくない子どもも含まれていると考えられる。

表1 回答生徒数 (%)

	男	女	無回答	合計
中1	87(45.8)	97(51.0)	6(3.2)	190(100.0)
中2	11(52.4)	10(47.6)	0(0.0)	21(100.0)
中3	84(43.1)	110(56.4)	1(0.5)	195(100.0)
合計	182(44.8)	217(53.5)	7(1.7)	406(100.0)

2. LD高群, PDD高群の群分け

LD高群：LDに関する質問項目については、前回とほぼ同様である。文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目から抽出した。聴く、話す、読む、書く、計算する、推論するの6領域各5項目の中から、親が家庭での子どもの様子から判断しやすいものを3項目ずつ、合計18項目選んだ。回答は文部科学省の評点に合わせて、ない—0、まれにある—1、ときどきある—2、よくある—3とし、点数化した。

表2 PDD, LD合計点（学年別）

	人数	平均値	標準偏差	中1と中3の差
LD合計点	中1	189	9.7	11.1
	中2	20	15.8	14.0
	中3	200	7.1	9.5
	合計	409	8.7	10.7
PDD合計点	中1	201	2.5	3.7
	中2	20	4.7	5.9
	中3	201	1.8	3.2
	合計	422	2.2	3.6

χ^2 検定 * $p < .05$

表3 学年別LD高群 (%)

	LD一般群	LD高群	合計
中1	160(84.7)	29(15.3)	189(100.0)
中2	13(65.0)	7(35.0)	20(100.0)
中3	172(86.0)	28(14.0)	200(100.0)
合計	345(84.4)	64(15.6)	409(100.0)

表4 学年別PDD高群 (%)

	PDD一般群	PDD高群	合計
中1	170(84.6)	31(15.4)	201(100.0)
中2	15(75.0)	5(25.0)	20(100.0)
中3	173(86.1)	28(13.9)	201(100.0)
合計	358(84.8)	64(15.2)	422(100.0)

今回は、高群を「平均値+標準偏差」以上の得点のものとした²⁰⁾。中1では21点、中3では17点以上である。中2は縦断調査開始時に保健センターのフォローアップ児が多いため、同様の手続きは使えないため、便宜的に中1と中3の間の数字を取って、19点とした。高群より低得点の人は「一般群」とした(表2, 表3)。

PDD 高群：広汎性発達障害に関する質問項目については、前回とほぼ同様である。LD 項目と同様、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」(2002年実施)の質問項目から抽出した12項目である(表3)。回答は、文部科学省の評点にあわせて、いいえ—0, 多少—1, はい—2とし、点数化した。高群を「平均値+標準偏差」以上の得点のものとした。その結果、中1で7点、中3で5点となり、中2は前記と同様にその間の6点とし、それ以上の得点を得た人を「PDD 高群」、それ以外を「PDD 一般群」とした(表2, 表4)。

なお、3学年全体の中で、LD 高群でありかつPDD 高群である、つまりLD 傾向とPDD 傾向の両方を持ち合わせている子どもは30名(全体の7.4%)、LD 傾向のみある子どもは33名(全体の8.1%)、PDD 傾向のみは28名(全体の6.9%)であった。

3. 分析項目

調査内容のうち、下記の項目について、LD、PDD それぞれ高群と一般群の比較をした。具体的な質問項目、因子分析の結果は、結果第1報を参照されたい²¹⁾。ほとんどの項目において中1と中3の有意な差がみられなかったので、中1～中3まで全体をいっしょにして集計した。

(1) 親調査

①子育て不安

子育て不安に関しては、第7回調査は第6回調査と同じ項目であり、因子分析結果も同様である。17の各質問項目に対する回答は、「まったくない」から「よくある」までの4択で、それぞれ0点から3点を配点した。因子分析の結果に沿って、因子ごとに合計点を出した。得点が高いほど、子育て不安や心身の疲労は高いこ

と、育児満足が高いことを示している。

②学校関連不安

学校関連不安には、第6回調査にはなかった2つの項目(「家庭学習の習慣」「携帯やパソコンの使い方」を増やし11項目とした。前回は2因子構造であったが、今回の調査では「子どもの友達」と「親どうしの関係」が分かれ、3つの因子が見出された。調査項目は第7回調査結果第1報参照のこと。回答は「そう思わない」から「そう思う」の4件法でそれぞれ0点から3点を配点した。因子分析の結果に沿って、因子ごとに合計点を出した。得点が高いほど不安が高いことを示す。

③子育てのストレス意識

自分の子育てのストレスをどうしたいと思っているかについては、第6回調査と同様に、「子育てストレスを軽減させたい」「子育てから解放されたい」の質問項目を設定した。それに対する回答(「全然思わない」から「よく思う」までの4択)にそれぞれ0点から3点を配点した。得点が高いほどそのような傾向が高いことを示す。

④子どもの成績、学習塾

子どもの学習(成績)がクラスの中で相対的にどのような位置にあるか、学習塾に行っているかどうかを答えてもらった(第5回調査からの質問項目)。

⑤家での親子の話し合い

第6回調査と同様に、学校での出来事や勉強について、親子でどの程度話すかについての回答は「全然ない」から「よくある」の4件法でそれぞれ0点から3点を配点した。得点が高いほど話し合う傾向が高いことを示す。

⑥養育態度についての親の自認

第6回調査と同様に、過干渉や感情的な養育態度をとってしまうかどうかについての回答は「全然ない」から「よくある」の4件法でそれぞれ0点から3点を配点した。得点が高いほどそのような傾向にあることを自覚していることを示す。また、このような養育態度に対して、「子どものあるがままを受け入れていきたい」と思っているかどうかについて尋ねた。

⑦学校・地域とのかかわり

第6回調査と同様に、身近な家の周りや学校でのつながり、地域行事への参加について尋ねた。

⑧相談の有無，相談相手

前回調査と同様に，子どもの学校生活での心配事についての相談の有無，相談相手について尋ねた。

⑨子どもの学校での戸惑いや悩み

子どもの戸惑い・悩みの様子は，第7回調査で新たに設定した質問で，この1年間子どもが，勉強面，友達関係，部活動関係，先生との関係，親子関係で戸惑ったり悩んだりしている様子があったかどうか，親の認知を尋ねた。回答は「全然ない」から「よくある」の4件法でそれぞれ0点から3点を配点した。得点が高いほどそのような傾向にあることを自覚していることを示す。

⑩先生・学校に対する要望と満足度

先生・学校への要望を尋ねた。上記②で挙げた学校に関する不安や心配ごとを親が抱えている場合，それを要望として学校に伝えたのか，伝えた時学校側が対応してくれたのか，その対応に対して親が満足しているのかどうかを尋ねた。また，今回新たに，先生や学校への満足度と要望の程度について，内容別に9項目について尋ねた。

⑪子育ての支援ニーズ

第7回調査で新たに，子育ての支援ニーズとして，子どもの遊び場・居場所，経済的支援，相談の場，地域の人々との交流，先輩の父母との交流，将来の進路や職業を考える機会や出会いなどについてそれぞれ必要度を尋ねた。回答は「全然ない」から「よくある」の4件法でそれぞれ0点から3点を配点した。得点が高いほどそのようなニーズが高いことを示す。

また，第6回調査と同様に，子育ての支えとなる人やグループ，子どもの特性や育て方についての情報についてのニーズを尋ねた。

(2) 子ども調査

①「子どもの主観的な心身両面からの健康度・生活全体の満足度」をチェックするQOL尺度—Kid-KINDL^R24項目について，5件法（1 ぜんぜんなかった～5 いつもだった）で回答を得た。英語版，ドイツ語版を確認のうえ，「日本版QOL尺度」とほぼ同じ表現を用いた¹⁹⁾。なお，日本版QOLを作成したメンバーである古荘と，原作者であるRavensらには，その使用許可をとってある。

回答は「ぜんぜんなかった」から「いつもだった」の

5件法で，それぞれ1点から5点を配点し，Kid-KINDL^Rのマニュアルにしたがって，100点満点に換算した得点を用いた。得点が高いほど満足度が高いことを示す。

②精神的安定（意欲・イライラ・攻撃性・集中力・睡眠）に関する5項目（表17参照）について，①に含まれていないうつ傾向に関連する質問項目を設定した。回答は「ぜんぜんなかった」から「いつもだった」の5件法で，それぞれ1点から5点を配点した。得点が高いほど精神的に不安定であることを示す。

③父母が話をよく聞いてくれるかについて，「ぜんぜんない」から「いつもある」の6件法で回答を得，それぞれ1点から6点までを配点した。

④今の学年になって，「学校に行きたくない」と思ったことについて，「ぜんぜんない」から「いつもある」の6件法で回答を得，それぞれ1点から6点までを配点した。得点が高いほど学校に行きたくないと思うことが多いことを表している。

3. 倫理的配慮

前回調査の質問項目の最後に次回の調査への協力についても尋ね，了承して住所・氏名を記した人を継続調査対象者とした。プライバシー保護のため，調査は無記名で行った。調査の依頼にあたっては，研究の目的，内容，方法，個人情報保護などの説明を，調査用紙の表面・依頼文に記述し，調査への回答協力が任意であること，個々の質問についても，回答したくない質問・回答しにくい質問には，回答する必要がないこと，回答しないことによる不利益もないこと，個々の回答や個人が特定されるような情報は発表しないことを明記した。親の了解と子どもの同意が得られた場合，子どもに質問紙に回答してもらうこととした。子どもの質問紙にも個人情報の保護，回答を拒否する自由について，わかりやすい説明を付した。回答した調査用紙を，親子別々に入れる内封筒も同封送付した。前回までの個々人の回答データとマッチングするため，調査用紙にID番号をつけ，回答データは，ID番号によって管理し匿名化した。

なお，本研究の実施については，2013年2月に愛知県立大学研究倫理審査委員会に審査を申請し，許可を得ている。

III. 結果と考察

1. 母親の子育て不安と養育状況

(1) 子育て不安

表5のとおり、LD高群、PDD高群とも、一般群に比べ、子育てや子どもに対する不安得点が有意に高く、子育て生活満足感得点は有意に低く、身心の疲労得点は有意に高い。小5、中1を対象とした第6回調査結果と同様、LD高群もPDD高群も、子育て不安が高い状態である。

(2) 学校関連不安

学校関連不安についても同様の比較を行った(表6)。LD高群では、子どもの友達関係におよび子どもの進路や勉強についていけないのではないか、躰の悪い子と思われるのではないかという不安が有意に高く、母親自身と他の親との関係についての不安も有意に高い。PDD高群でも、これらがすべて有意に高い。これは前回の第6回調査とも同じ傾向である。

(3) 子育てのストレス意識

「子育てストレスを軽減させたい」「子育てから解放されたい」の質問項目については2項目とも、LD高群もPDD高群も一般群より点数が有意に低かった(表7)。「子育てストレスを軽減させたい」「子育てから解放され

表5 子育て不安得点

		人数	平均値	標準偏差	t 値
子育て・子ども不安	LD 一般群	343	8.81	4.23	-7.163
	LD 高群	64	12.97	4.45	***
生活満足	LD 一般群	342	12.00	2.74	-4.213
	LD 高群	63	10.40	2.98	***
身心疲労	LD 一般群	345	2.82	1.45	-4.07
	LD 高群	64	3.61	1.26	***
子育て・子ども不安	PDD 一般群	356	8.84	4.29	-7.227
	PDD 高群	64	13.11	4.70	***
生活満足	PDD 一般群	353	12.08	2.71	-5.333
	PDD 高群	64	10.09	2.90	***
身心の疲労	PDD 一般群	357	2.84	1.44	-3.502
	PDD 高群	64	3.53	1.54	**

t 検定 ** $p<.01$, *** $p<.001$

表6 学校関連不安得点

		人数	平均値	標準偏差	t 値
友達関係	LD 一般群	345	0.99	2.05	-4.607
	LD 高群	64	3.06	3.49	***
勉強・躰	LD 一般群	341	3.40	3.23	-7.972
	LD 高群	64	7.00	3.74	***
親同士の関係	LD 一般群	342	0.70	1.17	-3.278
	LD 高群	63	1.30	1.36	**
友達関係	PDD 一般群	358	0.73	1.61	-8.403
	PDD 高群	64	4.42	3.45	***
勉強・躰	PDD 一般群	354	3.65	3.39	-4.54
	PDD 高群	63	6.06	3.98	***
親同士の関係	PDD 一般群	355	0.66	1.11	-4.51
	PDD 高群	64	1.56	1.52	***

t 検定 ** $p<.01$, *** $p<.001$

表7 子育てストレス意識

		人数	平均値	標準偏差	t 値
子育てのストレスを軽減したい	LD 一般群	341	2.62	0.74	3.940
	LD 高群	64	2.22	0.79	***
	PDD 一般群	354	2.62	0.75	4.421
	PDD 高群	64	2.17	0.79	***
子育てから解放されたい	LD 一般群	341	2.93	0.78	2.534
	LD 高群	64	2.66	0.84	*
	PDD 一般群	354	2.93	0.78	2.787
	PDD 高群	64	2.61	0.87	**

t 検定 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表8 子どもの成績についての親の自認

		上位	中の上	中	中の下	下位	合計	
LD 一般群	人数	95	90	91	47	21	344	
	%	27.6%	26.2%	26.5%	13.7%	6.1%	100.0%	***
LD 高群	人数	0	7	16	12	28	63	
	%	0.0%	11.1%	25.4%	19.0%	44.4%	100.0%	
PDD 一般群	人数	92	85	92	52	36	357	
	%	25.8%	23.8%	25.8%	14.6%	10.1%	100.0%	**
PDD 高群	人数	5	13	18	10	16	62	
	%	8.1%	21.0%	29.0%	16.1%	25.8%	100.0%	

 χ^2 検定 ** $p<.01$, *** $p<.001$

表9 学習塾

		行っている	行っていない	合計	
LD 一般群	人数	221	124	345	
	%	64.1%	35.9%	100.0%	n.s.
LD 高群	人数	35	29	64	
	%	54.7%	45.3%	100.0%	
PDD 一般群	人数	231	127	412	
	%	64.5%	35.5%	100.0%	*
PDD 高群	人数	31	33	70	
	%	48.4%	51.6%	100.0%	

 χ^2 検定 * $p<.05$

たい」と強く思っている人が多く、第6回調査と同様の傾向がみられた。

(4) 子どもの成績、通塾

子どもの成績についての親の自認は、LD 高群、PDD 高群ともに一般群との有意な差がみられた(表8)。第6回調査と同様に、高群の方が一般群よりも成績の低い方であると認識している親が多く、特にLD 高群では、中の下か、下位であると認識している親が63.4%いた。

通塾については、LD 高群の54.7%、LD 一般群の64.1%、PDD 高群の48.4%、PDD 一般群の64.5%が学習塾に通っていた(表9)。第6回調査では有意差がみら

れなかったが、今回はPDD 高群は、一般群よりも通塾する率が有意に低かった。

(5) 家での親子の話し合い

「学校の出来事や友達のことについて子どもと話をする」「子どもと勉強や進路のことについて話をする」では、LD 高群、PDD 高群ともに一般群よりも有意に得点が低かった(表10)。第6回調査では後者については有意差はみられなかったが、今回の調査では、一般群が勉強や進路のことを話す機会が多くなったのに比べ、LD 高群・PDD 高群ではそれほど増えていないことにより差が生じている。

表10 子どもと話す

		人数	平均値	標準偏差	t 値
学校の出来事 や友達のこと について子ど もと話す	LD 一般群	342	2.47	0.61	2.939
	LD 高群	64	2.22	0.72	**
	PDD 一般群	356	2.49	0.60	4.842
	PDD 高群	63	2.08	0.73	***
勉強・進路に ついて話す	LD 一般群	342	2.36	0.58	2.526
	LD 高群	64	2.16	0.65	*
	PDD 一般群	356	2.36	0.59	2.614
	PDD 高群	63	2.14	0.64	**

t 検定 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表11 養育態度

		人数	平均値	標準偏差	t 値
子どもがして いることを 黙って見てい られなくて干 渉する	LD 一般群	342	1.76	0.68	4.603
	LD 高群	64	2.16	0.62	***
	PDD 一般群	356	1.77	0.68	3.872
	PDD 高群	63	2.13	0.63	***
子どもを感情 的に叱ってし まう	LD 一般群	345	1.48	0.76	4.759
	LD 高群	64	1.91	0.64	***
	PDD 一般群	358	1.51	0.78	3.107
	PDD 高群	64	1.78	0.63	**

t 検定 ** $p<.01$, *** $p<.001$

表12 子どものあるがママを受け入れていきたい

		今そうしてい るので、この ままでよい	今そうしてい るが、増やし たい	今そうしてい ないが、この ままでよい	今そうしてい ないので、増 やしたい	合計	
LD 一般群	人数	211	98	11	22	342	**
	%	61.7%	28.7%	3.2%	6.4%	100.0%	
LD 高群	人数	25	23	4	11	63	
	%	39.7%	36.5%	6.3%	17.5%	100.0%	
PDD 一般群	人数	212	103	11	29	355	n.s.
	%	59.7%	29.0%	3.1%	8.2%	100.0%	
PDD 高群	人数	30	21	4	8	63	
	%	47.6%	33.3%	6.3%	12.7%	100.0%	

χ^2 検定 ** $p<.01$

(6) 養育態度についての親の自認

養育態度の得点については、LD 高群、PDD 高群はともに一般群より有意に高かった（表11）。第6回調査同様、「子どもがしていることを黙って見ていられなくて干渉する」、「子どもを感情的に叱ってしまう」ことがあることを自認している割合が高いことを示している。

このような現在の養育態度に対して、今後「子どものあるがママを受け入れていきたい」と思っているかどうか尋ねた結果は、表12のとおりである。LD 高群は一般群に比べて、「今そうしているので、このままでよい」

が少なく、「今そうしているが、もっとそうしたい」、「今そうしていないので、増やしたい」が多く、第6回調査と同様の傾向がみられた。PDD 高群は第6回調査ではLD 高群と同様に有意差がみられたが、今回調査では有意差がみられなかった。

(7) 学校・地域とのかかわり

「PTA 役員など学校の仕事の手伝いをする」頻度、「学校のクラス懇談会などに参加する」頻度、「地域や自治体のイベントや行事に参加する」頻度、「子どもの友達

表13 相談の有無

		ある	ない	合計	χ^2 検定
LD 一般群	人数	205	88	293	n.s.
	%	70.0%	30.0%	100.0%	
LD 高群	人数	45	11	56	
	%	80.4%	19.6%	100.0%	
PDD 一般群	人数	212	88	300	n.s.
	%	70.7%	29.3%	100.0%	
PDD 高群	人数	46	15	61	
	%	75.4%	24.6%	100.0%	

表14 相談相手

(複数回答)

		夫	近所知人	祖父母	先生	友人	相談機関	カウンセラー
LD 一般群	人数	164	109	72	46	78	2	7
	%	78.8%	52.4%	34.6%	22.1%	37.5%	1.0%	3.4%
LD 高群	人数	35	26	18	12	10	4	2
	%	74.5%	55.3%	38.3%	25.5%	21.3%	8.5%	4.3%
						*	*	
PDD 一般群	人数	166	113	75	47	79	4	5
	%	76.5%	52.1%	34.6%	21.7%	36.4%	1.8%	2.3%
PDD 高群	人数	38	26	18	16	12	4	5
	%	82.6%	56.5%	39.1%	34.8%	26.1%	8.7%	10.9%
						*	*	

 χ^2 検定 * $p<.05$

の親と話をする」頻度は、LD 高群と LD 一般群、PDD 高群と PDD 一般群の間に有意な差はみられなかった。

(8) 相談の有無、相談相手

子どもの学校生活での心配事について相談したことがある親は、LD 高群の86.7%、PDD 高群の78.9%であるが、一般群との間には有意差がみられなかった(表13)。第6回調査では、有が一般群の6割ほどであったが、今回は一般群も7割の親が相談したことがあり、差が縮まっている。

相談相手については、LD 高群、PDD 高群ともに「相談機関」を相談相手として選ぶ比率が一般群に比べて高かった。また、LD 高群では「友人」が少なく、PDD 高群では「カウンセラー」が高かった。第6回調査では、LD 高群の中1とPDD 高群の小5、中1で「先生」の比率が有意に高かったが、今回はいずれの高群も一般群に比べると高い傾向はうかがわれたが、有意差は認められなかった。

(9) 子どもの学校での戸惑いや悩み

「子どもの戸惑い・悩みの様子」があった比率が一般群に比べ有意に高かった項目は、LD 高群では、友達関係以外の「学校での勉強面」「先生との関係」「部活動」「親子関係」であり、PDD 高群では、勉強面以外の「友達関係」「先生との関係」「部活動」「親子関係」であった。そして、高群も一般群もこれらの中では勉強面で子どもが悩んでいると感じている親が最も多い(表15)。

また、特徴的なのは「よくわからない」と親が答えている比率がLD 高群、PDD 高群ともに高いことである。実際に子どもが悩んでいるのかどうか、何について悩んでいるのか分かりにくい場合親として対応するすべが見つかりにくく、また悩みも相談しにくいものとなるだろう。

2. 子どもの健康状態と生活の満足度

(1) 子どものQOL尺度による得点

子ども調査によるQOL得点の平均値は、中1 70.1 (SD14.7)、中3 68.0 (SD13.2)であり、両者に有意な差はないが、小学生のときより下がってきている。LD

表15 子どもの戸惑い・悩みの様子

		あった	なかった	よくわからない		
学校での 勉強面	LD 一般群	342	48.8%	45.6%	5.6%	***
	LD 高群	64	67.2%	18.8%	14.1%	
	PDD 一般群	355	50.7%	43.1%	6.2%	n.s.
	PDD 高群	64	59.4%	29.7%	10.9%	
友達関係	LD 一般群	342	25.4%	65.5%	9.1%	n.s.
	LD 高群	64	31.3%	56.3%	12.5%	
	PDD 一般群	355	23.4%	67.0%	9.6%	**
	PDD 高群	64	40.6%	46.9%	12.5%	
学校の先 生との関 係	LD 一般群	343	14.3%	78.4%	7.3%	*
	LD 高群	64	18.8%	64.1%	17.2%	
	PDD 一般群	356	15.2%	78.9%	5.9%	***
	PDD 高群	64	15.6%	60.9%	23.4%	
部活動	LD 一般群	342	29.5%	64.3%	4.4%	***
	LD 高群	64	28.1%	40.6%	18.8%	
	PDD 一般群	355	23.4%	67.0%	9.6%	**
	PDD 高群	64	40.6%	46.9%	12.5%	
親子関係	LD 一般群	343	15.5%	72.0%	12.5%	**
	LD 高群	64	25.0%	48.4%	26.6%	
	PDD 一般群	356	15.2%	78.9%	5.9%	***
	PDD 高群	64	15.6%	60.9%	23.4%	

t検定 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

高群は「自尊感情」と「家族」以外のすべての領域で、PDD高群は前回調査結果と同様にすべての領域で、それぞれ一般群よりも有意に得点が低かった（表16）。

(2) 子どもの精神的安定

精神的安定に関する項目の平均値については、「よく眠れた」については有意な差がみられなかったが、LD傾向における「何もやる気がしないこと」以外はすべての項目において、LD高群・PDD高群のほうが一般群より点数が有意に低く、精神的に安定していない状況がみら

れた（表17、表18）。第6回調査では、LD高群は「何かに集中できないこと」のみが一般群より有意に低かったが、今回調査ではイライラ・怒りでも有意差がみられた。

(3) 父母に話を聞いてもらえるか

父母に話を聞いてもらえているかについては、LD高群もPDD高群も一般群よりも得点が有意に低く、聴いてもらえないことが多いと感じている子どもが多いようである（表19）。第6回調査の小5ではこのような有意差はみられなかった。

表16 QOL得点と6下位領域得点の平均値

		QOL得点	身体的健康	情緒的 Well-being	自尊感情	家族	友達	学校
LD 一般群	n=330	70.0	77.8	85.9	43.4	78.4	80.0	54.6
LD 高群	n=60	62.6	71.9	77.9	38	72.9	70.9	43.5
t検定	t値	3.899	2.528	2.729	1.518	1.866	2.627	3.926
		***	*	**	n.s.	n.s.	*	***
PDD 一般群	n=346	70.5	77.9	86.6	44.0	78.9	81.7	53.9
PDD 高群	n=57	58.6	70	72	32.8	69.4	61.2	46.5
t検定	t値	4.953	2.717	4.359	3.114	2.674	5.733	2.579
		***	**	***	**	**	***	*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表17 LD一般群と高群の精神的安定に関する項目の平均値

	一般群		LD高群		t検定	
	n	平均値	n	平均値	t値	
★何もやる気がしないこと	332	3.5	60	3.5	0.313	n.s.
★イライラすること	333	3.7	60	3.2	2.782	**
★だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと	332	4.1	60	3.8	2.256	*
★何かに集中できないこと	331	3.6	60	3.1	2.769	**
よく眠れた	333	4.2	60	3.9	1.982	n.s.
平均点	329	3.8	60	3.5	3.149	**
★逆転項目						* $p<.05$, ** $p<.01$

表18 PDD一般群と高群の精神的安定に関する項目の平均値

	一般群		PDD高群		t検定	
	n	平均値	n	平均値	t値	
★何もやる気がしないこと	345	3.6	57	3.0	2.973	**
★イライラすること	346	3.7	57	3.2	2.820	**
★だれかに怒りをぶつきたいと思ったこと	345	4.1	57	3.5	3.379	**
★何かに集中できないこと	344	3.6	57	3.0	3.450	**
よく眠れた	346	4.2	57	4.0	1.226	n.s.
平均点	342	3.8	57	3.4	3.683	***
★逆転項目						** $p<.01$, *** $p<.001$

表19 父母は話をきいてくれる

	人数	平均値	標準偏差	t値
LD一般群	333	5.23	0.87	2.713
LD高群	60	4.85	1.01	**
PDD一般群	346	5.25	0.83	3.578
PDD高群	57	4.65	1.23	**
				t検定 ** $p<.01$

表20 学校へいきたくない

	人数	平均値	標準偏差	t値
LD一般群	333	2.22	1.48	0.308
LD高群	59	2.15	1.54	n.s.
PDD一般群	345	2.15	1.44	2.275
PDD高群	57	2.70	1.72	*
				t検定 * $p<.05$

(4) 不登校意識

「不登校意識」得点については、LDの場合は有意な差は認められなかったが、PDD高群は、一般群より有意に不登校意識得点が高かった（表20）。前回調査と同様の傾向がみられた。

3. 親の満足度と支援ニーズ

(1) 先生・学校に対する要望と満足度

表21のとおり、「1.先生の子どもの個性や特性の理解」「5.子どもの様子や友達関係への先生の目配り」は、LD高群、PDD高群ともに、「もっと要望する」人の比率が高く、特に1.の質問については「もっと要望する」が一般群の倍ほどある。

LD高群は「2.授業でわかりやすく丁寧に教えても

らう」「3.宿題を適切に出してもらおうこと」「4.授業が理解できていない場合の補習や個別のフォロー」「8.学校での様子を知らせてもらう」「9.保護者が気軽に質問・相談できる」など、学習面でのきめ細かい配慮や家庭との連携を要望している比率が高い。

学校や先生に要望を伝えたことがあるかどうかについては、「伝えたことがある」は、PDD高群の65.6%であり、一般群の48.0%に比べて有意に高かった。LD高群については有意な差は見られなかった（表22）。第6回調査では、「伝えたことがある」はそれぞれの高群の85%前後、一般群の65%であったので、全体的に伝えることが少なくなってきた。

要望を伝えたときの学校の対応の有無についても対応への満足度についても、前回調査と同様に、LD・PDD高群と一般群との有意な差はみられなかった。

表21 学校や先生に対する満足度・要望

		n	満足して いる	どちらとも いけない	もっと要望 する	
1. 先生の子どもの 個性や特性の理 解	LD 一般群	342	49.1%	36.0%	14.9%	**
	LD 高群	64	32.8%	37.5%	29.7%	
	PDD 一般群	355	48.5%	35.8%	15.8%	*
	PDD 高群	63	33.3%	36.5%	30.2%	
2. 授業でわかりや すく丁寧に教え てもらおう	LD 一般群	342	31.3%	43.0%	25.7%	**
	LD 高群	64	12.5%	42.2%	45.3%	
	PDD 一般群	355	29.6%	42.5%	27.9%	n.s.
	PDD 高群	63	19.0%	44.4%	36.5%	
3. 宿題を適切に出 してもらおうこと	LD 一般群	342	46.8%	40.1%	13.2%	**
	LD 高群	64	26.6%	45.3%	28.1%	
	PDD 一般群	355	46.2%	39.4%	14.4%	*
	PDD 高群	63	28.6%	46.0%	25.4%	
4. 授業が理解でき ていない場合の 補習や個別の フォロー	LD 一般群	341	28.2%	34.0%	37.8%	***
	LD 高群	64	7.8%	29.7%	62.5%	
	PDD 一般群	354	24.9%	33.9%	41.2%	n.s.
	PDD 高群	63	20.6%	28.6%	50.8%	
5. 子どもの様子や 友達関係などへ の先生の見配り	LD 一般群	342	38.9%	43.0%	18.1%	**
	LD 高群	64	26.6%	34.4%	39.1%	
	PDD 一般群	355	39.7%	42.0%	18.3%	**
	PDD 高群	63	22.2%	41.3%	36.5%	
6. 進路や受験につ いての適切な情 報提供	LD 一般群	341	32.8%	27.3%	39.9%	n.s.
	LD 高群	64	23.4%	31.3%	45.3%	
	PDD 一般群	354	33.6%	26.8%	39.5%	n.s.
	PDD 高群	63	22.2%	30.2%	47.6%	
7. 部活動の充実	LD 一般群	342	49.1%	30.1%	20.8%	n.s.
	LD 高群	63	36.5%	44.4%	19.0%	
	PDD 一般群	354	49.2%	29.4%	21.5%	*
	PDD 高群	63	34.9%	47.6%	17.5%	
8. 学校の様子を知 らせてもらうこ と	LD 一般群	342	37.4%	43.9%	18.7%	*
	LD 高群	64	21.9%	51.6%	26.6%	
	PDD 一般群	354	37.0%	44.4%	18.6%	n.s.
	PDD 高群	63	27.0%	46.0%	27.0%	
9. 保護者が気軽に 質問・相談でき る	LD 一般群	341	32.8%	49.3%	17.9%	*
	LD 高群	64	25.0%	42.2%	32.8%	
	PDD 一般群	354	32.8%	48.0%	19.2%	n.s.
	PDD 高群	63	27.0%	50.8%	22.2%	

 χ^2 検定 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(2) 子育ての支援ニーズ

子育てに必要なサポートについて、LD・PDD 高群と一般群の平均値を比較した(表23)。LD 高群では、「無料あるいは安価で勉強を教えてくれる場」「子どもや子育てについて親どうしおしゃべりができる場」「先輩の父母のお話を聞く機会」「子どもの発達や育ちについて相談する専門機関」「学校についての第三者への相談窓口」「子どもや子育てについての講演会」「子どもが地域の人々と交流できる機会」のニーズが一般群に比べて

表22 要望を伝えたことがあるか

		ある	ない	合計	
LD 一般群	人数	165	169	334	n.s.
	%	49.4%	50.6%	100.0%	
LD 高群	人数	37	26	63	n.s.
	%	58.7%	41.3%	100.0%	
PDD 一般群	人数	166	180	346	**
	%	48.0%	52.0%	100.0%	
PDD 高群	人数	42	22	64	**
	%	65.6%	34.4%	100.0%	

 χ^2 検定 ** $p<.01$

表23 子育て支援ニーズ

		人数	平均値	標準偏差	t 値
1. 子どもが思いっきり遊べる公園や遊び場	LD 一般群	345	1.34	0.76	0.267
	LD 高群	63	1.32	0.74	
	PDD 一般群	357	1.36	0.75	
	PDD 高群	63	1.29	0.81	
2. 家庭外で子どもが安心して過ごせる居場所	LD 一般群	345	1.34	0.72	0.696
	LD 高群	63	1.41	0.69	
	PDD 一般群	357	1.36	0.71	
	PDD 高群	64	1.38	0.72	
3. 無料あるいは安価で勉強を教えてくれる場	LD 一般群	345	1.19	0.78	2.018
	LD 高群	63	1.40	0.69	
	PDD 一般群	357	1.20	0.78	
	PDD 高群	64	1.39	0.68	
4. 子どもや子育てについて親どうしおしゃべりができる場	LD 一般群	344	0.85	0.79	2.294
	LD 高群	63	1.10	0.69	
	PDD 一般群	356	0.86	0.79	
	PDD 高群	63	0.97	0.74	
5. 先輩の父母のお話を聞く機会	LD 一般群	345	0.72	0.75	3.095
	LD 高群	63	1.02	0.68	
	PDD 一般群	357	0.75	0.75	
	PDD 高群	64	0.94	0.71	
6. 子どもの発達や育ちについて相談する専門機関	LD 一般群	345	0.95	0.80	2.965
	LD 高群	63	1.27	0.70	
	PDD 一般群	357	0.98	0.80	
	PDD 高群	64	1.06	0.69	
7. 学校についての第三者への相談窓口	LD 一般群	345	1.12	0.74	2.795
	LD 高群	63	1.40	0.71	
	PDD 一般群	357	1.13	0.76	
	PDD 高群	64	1.30	0.66	
8. 経済的支援	LD 一般群	345	1.36	0.75	1.271
	LD 高群	63	1.49	0.72	
	PDD 一般群	356	1.38	0.74	
	PDD 高群	64	1.41	0.77	
9. 子どもや子育てについての講演会	LD 一般群	345	0.61	0.68	2.841
	LD 高群	63	0.87	0.71	
	PDD 一般群	356	0.65	0.69	
	PDD 高群	64	0.69	0.71	
10. 子どもが地域の人々と交流できる機会	LD 一般群	345	0.97	0.68	2.345
	LD 高群	63	1.19	0.64	
	PDD 一般群	357	1.01	0.67	
	PDD 高群	64	1.02	0.70	
11. 将来の進路や職業を考える機会や出会い	LD 一般群	345	1.54	0.61	4.68
	LD 高群	63	1.57	0.56	
	PDD 一般群	357	1.57	0.59	
	PDD 高群	64	1.48	0.64	

t 検定 * $p < .01$, ** $p < .01$

有意に高かった。PDD 高群も一般群より得点が高い傾向がみられたが、有意差が認められた項目はなかった。

子育て支援ニーズとして、「子育ての支えとなる人やグループ」については、LD 高群、PDD 高群ともに、一般

群との有意な差はなかった。第6回調査では、「今あり、このままでよい」が一般群の6割、LD 高群の5割、PDD 高群の4割あったのが、今回調査では、LD 高群・PDD 高群も一般群の比率に近づいてきたことによる(表24)。

表24 子育ての支えとなる人やグループ

		今あり、この ままでよい	今あるが増 やしたい	今ないが、こ のままでよい	今ないので 増やしたい	合計	χ^2 検定
LD 一般群	人数	204	48	72	17	341	n.s.
	%	59.8%	14.1%	21.1%	5.0%	100.0%	
LD 高群	人数	37	14	11	2	64	n.s.
	%	57.8%	21.9%	17.2%	3.1%	100.0%	
PDD 一般群	人数	217	51	70	16	354	n.s.
	%	61.3%	14.4%	19.8%	4.5%	100.0%	
PDD 高群	人数	33	12	16	3	64	n.s.
	%	51.6%	18.8%	25.0%	4.7%	100.0%	

表25 子どもの特性や育て方についての情報

		今あり、この ままでよい	今あるが増 やしたい	今ないが、こ のままでよい	今ないので 増やしたい	合計	
LD 一般群	人数	135	101	65	38	339	n.s.
	%	39.8%	29.8%	19.2%	11.2%	100.0%	
LD 高群	人数	24	20	7	13	64	n.s.
	%	37.5%	31.3%	10.9%	20.3%	100.0%	
PDD 一般群	人数	139	108	67	38	352	*
	%	39.5%	30.7%	19.0%	10.8%	100.0%	
PDD 高群	人数	22	19	8	15	64	*
	%	34.4%	29.7%	12.5%	23.4%	100.0%	

 χ^2 検定 * $p < .05$

また、「子どもの特性や育て方についての情報を積極的に得たい」については、PDD 高群では一般群との有意差があり、「今ないので増やしたい」とする人が一般群の2倍以上いた（表25）。第6回調査と比べると、「今あり、このままでよい」が一般群で約10ポイント、LD 高群で約20ポイント、PDD 高群で約15ポイント増加しているが、情報を求めている親は多い。

IV. まとめと今後の課題

以上の分析結果を、前回調査結果とも比較照合せながらまとめてみよう。

1. 親の不安・ストレス及び子育ての難しさと 子どもの心身の健康状態

LD・PDD 傾向の子どもの親は、一般群より子どもや子育ての不安が高く、心身の疲労感が強く、子育ての楽しさや満足感が低く、学校関連の不安も高く、子どもの友達関係や勉強・進路のことを心配している人が多いと

いえる。そのような不安・ストレスを自覚し、「子育てストレスを軽減させたい」「子育てから解放されたい」と強く思っている人も多い。これらの点については前回同様である。

親子の関係については、前回と同様、学校の出来事や友達について子どもと話をすることは、LD・PDD 傾向の子どもの親は一般群の親より少なかったが、今回、勉強や進路のことについて話をすることについても、有意な差がみられた。また、子どもがしていることを黙って見ていられなくて干渉したり、子どもを感情的に叱ってしまう親が多かった。子どもが難しさを抱えているがゆえに、学校や友達、勉強のことを話したがらなかったり、親も子どもを心配するあまり不適切な接し方をしてしまったりすることが予想される。

養育スタイル尺度を作成し、幼児から中3のADHD 傾向との関連について検討した松岡らも、ADHD 傾向をもつ子どもの親は、養育に対して肯定的な感情をもちにくく、育てにくさや対応の困難さを感じやすくなり、厳しく叱責する傾向をみだしている。また、子どもの年齢が上がるにつれて、子どもを叱責することは少なく

なっていくものの、養育を肯定的に捉えることも難しくなり同時に他者に相談したり子どもにつきそったりすることも少なくなっていくことが示されている²³⁾。

LD 傾向・PDD 傾向の子どもたち自身も、中学生になって父母に話を聞いてもらえないと感じることが多い子どもの比率が高く、親子関係の難しさが窺えた。子どもの QOL 得点も、LD 傾向・PDD 傾向の子どもは一般群よりも低かった。小学生では LD 高群は、学校領域（主に成績に関する項目）を中心として QOL 得点が低くなっていて、中学生では得点が低い領域が多くなってきている。また、PDD 高群は小学生の時期からほとんどすべての領域で一般群よりも有意に QOL 得点が低かったが、中学生でもさらに得点が低くなり同様の傾向が続いている。

精神的安定に関する項目の平均値についても、ほとんどの項目において、LD 傾向・PDD 傾向の子どものほうが一般群より点数が低い項目が多く、小学校時代よりさらに精神的に安定していない状況がみられた。

親が子どもの特徴に難しさや不安を感じている場合、その子どもも心身の健康度・生活の満足度が低く、子ども自らも困難や不安を感じる事が中学校になってますます多くなっている。親子相互に不安やストレスに影響を及ぼしていると考えられる。

2. LD 傾向と PDD 傾向における違い

前回調査では LD 傾向・PDD 傾向の子どもの親に共通する部分が多かったが、今回は、LD 傾向と PDD 傾向の親に子どもの現状認識やそれに対応した要望について違いがみられた。

まず、LD 傾向の子どもの親は、中学生になってくると成績がよくないと自認し、勉強や進路の不安が大きくなってきている。学校で、子どもが勉強面や先生との関係で悩んでいる様子があると感じている親も多い。学校や先生に対しては、子どもの特性を理解し、特に勉強面できめ細かい対応をしてもらえるよう要望している。学校での様子を知らせてもらうことや、保護者が気軽に質問・相談できるようにと要望していることは、学校と連携しながら家庭でも何とかして子どもの勉強をサポートしていきたいという努力や希望の表れであろう。しか

し、実際に要望を学校へ伝えたことがある親は、PDD 高群ほど多くはなく、子どもの育ちについて相談したり話を聞く場をより求めている。

一方、PDD 傾向の子どもの親は、子どもの成績については LD 傾向の子どもの場合ほど深刻に認識していない人もおり、子どものあるがまを受け入れていると感じている人が LD 傾向の子どもの親より多くなってきている。しかし、友達関係で子どもが悩んでいると感じ、先生に対しては友達関係への配慮を要望している人が多い。

また、「不登校意識」については、LD 傾向の子どもの場合は一般群と有意な差は認められなかったが、PDD 傾向の子どもは一般群より有意に不登校意識得点が高く、学校に行きたくないと思うことが多く、小学校高学年と同様の傾向がみられた。

3. LD 傾向・PDD 傾向の子どもをもつ親への支援

今回、学校関連で「親どうしの関係への不安」因子が見いだされ、それが LD 傾向・PDD 傾向の子どもの親には高いことが分かった。また、子どもの問題についての相談相手が「友人」とする比率は、LD・PDD 傾向の子どもの親では小学校時代より少なくなっている。これらの親は、子どもの特徴から不安やストレスが他の親たちと分かち合える性格のものではないと思っていることが窺われた。宋らも、高機能自閉症・アスペルガー障害の小中学生をもつ親が学校のことで困っていることとしては、先生との関係に次いで他の親との関係が多いことを明らかにしているが²⁴⁾、本調査では、LD・PDD 傾向のある子どもの親は相談する比率は低いものの、相談相手としては、中学生になって友人が減り、相談機関やカウンセラーなど、より専門的な機関に相談する人の比率が上がってきていることがわかった。また、学校の先生に要望を伝えることは小学校の時期よりも少なくなっている。

中村・池田らは、障害児の母親の養育行動の振り返りでは、専門機関を必要としているが、そこに通うことには多少の抵抗がみられるため、保育園や幼稚園、子育て支援センターなどの地域に根ざした支援環境が望ましいことを指摘している²⁵⁾。中学生という時期で読み替える

と、学校での支援体制を充実させ、場合によっては専門機関に繋いでいく取組みが必要であると言える。

また、先生の専門性については、別府・竹林は、教師の知識や研修の機会が少ないほど、軽度発達障害の子どもの問題行動を、家庭的要因（たとえば「家庭でのしつけが十分でないため」「親が子どもにかまひすぎ・甘やかしているため」など）を重視していることを明らかにしている²⁶⁾。

親たちも、「子どもの個性や特性の理解」を教師に切に要望しており、専門家による学校教師への研修も、より充実させていかなければならないだろう。学校の教師集団における理解が高まり、そのことが保護者の理解にも広がり、当該の親が「親どうしの関係に不安」を感じることなく、支え合えるようになっていくことも期待したい。

また、LD 高群・PDD 高群のうちの半分ほどは両方の特徴をもっている。その人たちは、一段と深刻な状況にあることが考えられる。この「重なり」の部分の人たちの分析は、今回も積み残しとなった。今後行っていく必要がある。

付 記

本研究は、科学研究費補助金による研究（基盤研究 (c)、2010年度～2013年度、課題番号22500701）「育児困難な親子への支援に関する思春期までの縦断的研究：経済格差・発達障害を中心に」（代表：神田直子、連携研究者：山本理絵、伊田勝憲、小淵隆司、石野陽子）による研究の一部である。

注

- 1) 宮脇克実・山本真由美「思春期の子育て不安尺度の作成」『徳島大学総合科学部人間科学研究』14 2006年 pp. 61-71.
- 2) 菊池陽子「児童期の子どもをもつ母親の子育て不安について—子離れを困難にする母親の意識が子育てに伴う不安感、ストレス反応に及ぼす影響—」『マクロ・カウンセリング研究』1 2002年 pp. 65-74.
- 3) 武内珠美「子育ての楽しさ つらさ」無藤隆他編『やわらかアカデミズム よくわかる発達心理学』ミネルヴァ書房 2004年 pp. 128-129.
- 4) 松永あけみ・塩崎政江・清水彩香「子どもの成長に伴う保護者の子育て意識の変化—幼児・小学生・中学生の保護者の比較—」群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター『群馬大学教育実践研究』第27号 2010年 pp. 269-279.
- 5) 大久保千恵・市来百合子他「思春期の親が必要とする支援の探索的研究」『奈良大学教育実践開発センター研究紀要』第21号 2012年 pp. 189-192.
- 6) 神田直子・山本理絵「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方」『児童教育学科論集』第35号 2001年 pp. 21-42.
- 7) 山本理絵・神田直子「子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方(2)—『育児不安』と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に—」『児童教育学科論集』第36号 2003年 pp. 39-54.
- 8) 山本理絵・神田直子「育児期の困難さに応じた子育て支援」『季刊保育問題研究』201号 2003年 新読書社 pp. 126-140.
- 9) 神田直子・山本理絵「子どもの『育てにくさ』と親の育児不安・マルトリートメント—1歳から4歳の発達の変化—」『児童教育学科論集』第37号 2004年 pp. 31-40.
- 10) 山本理絵・神田直子「子どもの『育てにくさ』と育児不安・マルトリートメント(2)—4歳児と6歳児を中心に—」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第53号 2005年 pp. 33-56.
- 11) 神田直子・山本理絵「子どもの『育てにくさ』と親の育児不安・マルトリートメント(3)—1歳から6歳の横断的分析および3年間の縦断的分析より—」『児童教育学科論集』第38号 2005年 pp. 1-12.
- 12) 神田直子・山本理絵「幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ—「第4回愛知の子ども縦断調査」結果報告第1報—」『愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編』第56号 2008年 pp. 17-34.
- 13) 神田直子・山本理絵「小学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性—『第5回愛知の子ども縦断調査』結果第1報—」『愛知県立大学教育福祉学部論集』58号 2010年 pp. 1-10.
- 14) 神田直子・山本理絵「学童期に攻撃行動や不注意の傾向をもつ子どもの幼児期における行動特徴—『第5回愛知の子ども縦断調査』結果第2報—」『大阪千代田短期大学紀要』第39号 2010年 pp. 1-12.
- 15) 山本理絵「小学生の心身の健康状態に関する調査研究—不登校意識との関連を中心に—」『人間発達学研究』第1号 2010年 pp. 37-52.
- 16) 山本理絵・神田直子「子どもの特性とQOL及び母親の子育て不安の関連に関する研究—『第5回愛知の子ども縦断調査』結果分析より—」愛知県立大学大学院人間発達学研究科『人間発達学研究』第2号 2011年 pp. 29-41.
- 17) 神田直子、山本理絵「小・中学生をもつ親の子育て状況と不安、子どもの特性：『第6回愛知の子ども縦断調査』結果（第1報）」『大阪千代田短期大学紀要』40号 2011年 pp. 27-44.
- 18) 山本理絵「小中学生の心身の健康状態に関する調査研究—不登校意識との関連を中心に—」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第60号 2012年 pp. 47-59.
- 19) 神田直子・山本理絵「LD, PDD傾向の子どもをもつ親の子育て困難感と支援ニーズ—『第6回愛知の子ども縦断調査』結果第2報—」『大阪千代田短期大学紀要』41号 2012年.
- 20) 第6回分析までは、「全体の得点上位10%以上」を高群としていたが、同点者が多く実際は14%程度になる場合もあるため、それに近い数として今回はこのような方法で高群を設定した。
- 21) 神田直子・山本理絵「中学生をもつ親の子育て状況・不安と子どもの特性—「第7回愛知の子ども縦断調査」結果第1報—」『教育福祉学部論集』62号 2014年 pp. 137-150.
- 22) ドイツのRavensとBullingerらは、子どものQOL (Quality

of Life) をチェックする QOL 尺度—Kid-KINDL^Rを開発した (Ravens-Sieberer U. 2003)。これを古庄らは日本語訳し「日本版 QOL 尺度」を作成し、活用している。この尺度は、身体的健康、情緒的 Well-being, 自尊感情, 家族, 友達, 学校の 6 領域 4 項目ずつからなり、日常生活面である家庭と学校における心身の健康と適応状態を考慮に入れた包括的かつ簡便な尺度であり、その信頼性・妥当性が確認されている。松嵩くみ子他「日本における『中学生版 QOL 尺度』の検討」『日本小児科学会雑誌』111 巻 11 号, 2007 年 pp. 1404-1410 参照。

23) 松岡弥玲他「養育スタイル尺度の作成：発達的变化と

ADHD 傾向との関連から」『発達心理学研究』第 22 巻 第 2 号 2011 年 pp. 179-188.

24) 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子「高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親の支援ニーズに関する調査研究」『東京学芸大紀要 第 1 部門 教育科学』55 2004 年 pp. 325-333.

25) 中村彩香・池田由紀江「発達障害児を持つ母親への支援に関する一考察」『健康科学大学紀要』5 2009 年 pp. 115-122.

26) 別府哲・竹林和子「軽度発達障害に関する教師の理解と意識」(ポスター発表 C, 研究発表)『日本教育心理学会総会発表論文集』46 2004 年 p. 342.